

日系ブラジル人コミュニティの社会構造の変化と地位達成における格差
—子どもの教育におけるブラジル人親の態度と教育達成の観点から—
Brazilian community's structural change and the educational achievement gap

Song Gi Jung (名古屋大学環境学研究科)

Song Gi Jung (Nagoya University Graduate School of Environmental Studies)

キーワード：教育達成、移民第二世代、ブラジル人コミュニティ、日系ブラジル人

1. 問題意識と背景

1990年代出入国管理法及び難民認定法の改正にともない日系ブラジル人の出稼ぎ移民が始まってからおよそ30年が経過した現在、ブラジル人社会はどのように変化しているのか。日系ブラジル人第二世代の場合、低い高校・大学進学率が主な課題として指摘され、彼らの不安定就労性と頻繁な移動、家族のサポートと情報不足などが原因として挙げられてきた。しかし、能勢（2015）は非集住地域の若者7人のライフヒストリー調査を通じて、親が自覚的に定住した場合は日本語や日本社会の存在が自然になってくるので高校に進学したという結果を提示している。このような定住と教育達成との肯定的な関係は鍛冶（2013）の研究からも明らかになっていて、リーマンショック後、定住を覚悟した日系ブラジル人は高校進学を希望する傾向があると主張した。本研究はリーマンショック以降、集住地域における日系ブラジル人の定住意識の変化とそれに従うコミュニティの構造の変化、そしてその変化が第二世代の教育達成に与える影響を明らかにしたい。

2. 調査対象と方法

本研究は国内最大ブラジル人集住地である豊田市保見団地を対象とする。調査方法は2021年8月から保見団地の学習支援教室での参与観察と、参加者とスタッフ、保見団地出身の第二世代と住民のインタビューを主にする。さらに、2016年名古屋大学社会学研究室が実施した「外国人集住地区のコミュニティ形成と国際化—保見団地の現在—」のデータを用いて外国人住民の外観を把握した。

3. 結果

(1) 定住化とブルカーラー労働者コミュニティとしての特徴

保見団地は2022年5月1日時点で全体人口6,755名の中3,818人が外国人住民で、日本人の住民がマイノリティになっている。団地は一戸建て住宅の保見緑苑、賃貸住宅を主とした公団保見ヶ丘、分譲住宅を主とした保見ヶ丘六区、県営住宅の県営保見の4つの自治区から構成されていて、この中で外国人住民は主に公団住宅と県営住宅に多く居住している。外国人住民の82.2%はブルーカラー職種に就業しているが、就業形態は男女ともにリーマンショック以降正規社員になった割合は高く、安定していると考えられる。しかし、仕事の満足度を4段階で調べた項目を見ると、正規従業員で2.65、非常勤・パート・派遣社員で2.62と差が見られないことから条件が改善されたとは言えない。また、日本語能力に関しても「あいさつ程度」、「全く話せない」層が54%と高く、ブラジル人住民の日本語能力もそれほどあまり高くないと言える。調査中、10年以上派遣会社を介し工場働いていて現在工場へ正規の仕事の提案を受けて悩んでいるブラジル人住民に対して、団地の日本人住民が「正規と言っても条件変わらない。もっといいところがあるはずだから今は反対。」と言う様子が見え、ブラジル人住民が多く携わっているブルカーラー労働者として正規転換が必ずしも日本語能力の工場や条件の改善と従うものではないと考えられる。このようなブルカーラー労働者コミュニティとしての団地の特徴は子どもの進路にも影響を及ぼし日本語を覚えなくて親が働く工場に就職をする事例がとても多

かった。

(2) 格差の発生とトランスナショナルな職業世界の出現

初来日年と現在地居住年数を見ると、居住年数の平均は9.71年だが、初来日を3区分に対して現在地居住年数を分けて見ると、半分が8年未満とリーマンショック後に入居しており1990年代から続けて住んでいる人は約3割に過ぎない。1990年代に初めて来日した62人のうち、リーマンショック後から保見に住んでる人はほぼ4割で残りの6割近くはリーマンショック後に転出・帰国しなかった定住意向が高い人たちであることが想定される。このような変化は、ブルカーラー労働者コミュニティの中で少なからず地位達成に成功するブラジル人の出現を可能にしている。調査では日本語能力が高い層を中心に市役所や学校、NPO団体などでブラジル人のための通訳の仕事しながらトランスナショナルな地位達成を遂げているブラジル人親が登場していることが分かった。彼らの共通点としては日本語能力が高く、居住地の移動をしたことがなく定住思考が強く、家族構成が安定していることが挙げられる。保見緑苑に住んでいるブラジル人住民Aさんは、来日初期は工場で単純労働だったが、日本語を覚え、中学校での通訳の仕事をしている。

(3) 子どもの教育達成と団地からの離脱

調査を行った3つの教室はそれぞれ参加の目標と学生の属性も大きく異なる。それぞれ不就学・ブラジル人学校の子どもの居場所提供、日本の高校に進学したい子どもたちへの日本語積み上げ教育、そして日本の学校に通っている子どもへの学習支援をおこなっている。前者の場合、家族の移動が多かったり、もしくは親・子どもともに日本語能力が低く、また教育への関心も多少少なかったことに対し、後者の二つの教室は専門職・管理職などについているなど親の人的資本も比較的に高く、勉強への働きかけが高いことが学生との会話からよく伝わってきた。また、そのような属性の違いは教室の参加率と休みの頻度とか進路への取り組み方などでも反映されていることが見られた。一方、後者の二つの教室には、日本語住民の割合が高い一戸建て住宅の保見緑苑に住んでいたたり、もしくは保見団地から出て行って外部から教室に通う学生もいた。中には、保見団地からあえて距離を置くため子どもを保見団地から遠くブラジル人の少ない学校にわざわざ行かせている親もいた。(2)のAさんの場合も、保見の学校だと「どうしても遅れてしまう」と思い、「ポルトガル語は捨ててもいい」という思いで娘を保見団地の外にある学校に行かせたという。その結果Aさんの娘は大学に行き日本の学校で教員として働いているが、学生時代、ブラジル人であることを隠したかったという話をしていた。

4. 結論

まず、ブラジル人の集住がブルカーラー労働者のグループではかえって日本語の習得と子どもの教育へのサポートを難しくし、ブルーカラーとしての世代的再生産をもたらしやすくなっている。一方、定住性と日本語能力が高い別のグループでは親は上昇移動、子どもは日本の学校文化に適応し、教育達成と地位達成がある程度可能になっていて、二つのグループで居住地、教育態度、生活態度でも違いがあることが見てとれた。しかし、その結果が日本人に同化されると地位達成、されないと地位再生産になりがちで、その間に位置するパターンは少ないことは注目する必要がある。このようなブラジル人コミュニティの階層的両極化を視野に入れながら外国生徒の支援の機能を検討していきたい。

<参考文献>

能勢桂介, 2015, 「若年日系ブラジル人の包摂と排除のプロセス：準集住地域の調査から：非集住地域の調査から」, 『移民政策研究』 7:118-132.

鍛冶致, 2013, 「数字でみる『外国にルーツをもつ子どもたち』—2012年から眺める『これまで』と『これから』」 志水宏吉他編, 272-284

豊田市HP内「豊田市外国人データ集」